

## そして僕たちは東京をめざした！

クラスのカラーや雰囲気というのは、様々な要因に左右される。もちろん、担任の先生の個性や教育理念等も大きな要素であるが、担任の先生も含めたクラスを構成する子ども一人一人の個性や相互の人間関係が複雑に絡み合い化学反応を起こしながら、そのクラスの色や形が形成される。

これまで、数多くのクラスとの出会いがあった。そして、自分が担任したクラスも含めて、色とりどりで多様なクラスばかりだった。

教職について間もない若い頃に担任したあるクラスは、他の教科担任の先生方から、毎日のように酷評された。

「授業をされていて、こんなに子どもたちの反応がないクラスは初めてだ。発言を求めても誰も挙手もしないし、まるで授業はいつもお通夜みたい。授業がやりにくくて仕方がない。」全ての先生が口を揃えて私に文句を言った。

確かに、自分が授業をされていてそんな雰囲気ではあった。でも、生徒一人一人を見ると、個性的だし元気がないわけではないし、みんないい子だ。個々の人間関係だって悪いとは思わない。ただ、授業中に発言するのが恥ずかしいのか斜に構えているのか、表面上は全体的に消極的な授業態度と捉えられても、反応がないクラスとレッテルを貼られても反論の余地は無かった。

でも、それは自分や子どもたちだけの責任ではないし、教科担任の先生方もベテランなのだから、もっと前向きなアドバイスをくれればいいのかと軽く流しながら、まあ、そのうち何とかなるだろうと、特に慌てることもないことと暢気に悠長に構えていた。

そもそも授業中も活発なクラスが良いとは限らないだろう。「子どもの発言が盛んで元気な子が多い」＝「活気があるクラス」でもないはずだ。

ところが、教育委員会の指導主事訪問での研究授業を、私が自分のクラスでやるのが、私が知らないところで決まってしまった。しかも、教科は「学級活動」でと指示されて。まさに寝耳に水だった。何かインパクトのある内容と考えた私は、これを機に、自分のクラスを校内一盛り上がりのあるクラスにしようと心に決め、「クラスイベント大プロジェクト」構想をぶち上げ、年間の学級活動の時間をフルに活用し、次のような取組をしたのだ。

- ①「クラス全体が盛り上がり団結力が高まるクラスイベントを考えよう！」というアンケートを実施。⇒32名の生徒から100近くのアイディアが出た。
- ②みんなから出された企画を一覧表にまとめ、自分が賛同できる企画を一人5つ選んで投票。
- ③投票結果を集計し、クラス全体で取り組む5つのイベントを最終的に決定

④クラスを5つの班に分け、それぞれの班で各企画の詳細な企画書を作成  
その結果、最終選考で残ったクラスイベントが、次のように決定した。

- A. キャンプでワイワイ（近くのキャンプ場で自炊・お泊まり）
- B. めざせ料理の鉄人（調理室を借りて班対抗の調理コンテスト）
- C. ミニミニ運動会（体育館での総合レクリエーション大会）
- D. ギネスに挑戦（ユニークな世界記録に挑戦）
- E. “欽ちゃんの仮装大賞”に出場しよう！

実際の研究授業では④の授業場面を公開した。公開した手前、この取組はすべて絵空事ですというわけにはいかず、クラス一丸で邁進することになる。

各班で練り上げた企画書をもとに、一つ一つのイベントを順調に実施していった。お金も時間もそれなりにかかったが、若い先生が一生懸命子どもたちのために頑張ってくれているからと、保護者も理解して応援してくれた。

そして残す企画は、Eの“欽ちゃんの仮装大賞”に出場しよう！”だけとなった。日本テレビから申込書を取り寄せ、子どもたちに仮装のアイデアを考えさせ、本格的な準備に取りかかった。テレビで見ていると何てことないと思っていたが、いざ自分たちでやるとなるとなかなかこれがたいへん。道具や衣装作りに手間も金もかかるし、演技も上手くいかない。休日の学校の体育館のステージで練習に励んだ。

ところが難題が持ち上がった。当時、新潟の系列テレビ局では予選会が実施されておらず、東京の日本テレビ本社まで行かなければならないのだ。

東京まで新幹線だと、引率や道具の運搬も大変だ。困っていたら、あるお父さんが「先生、観光バス貸し切って行こうって！俺もついていくからさ。」と言ってくれた。確かに運賃も新幹線より安く上がるし移動も運搬も楽だ。

金銭面の負担も、子どもが楽しみにしているから、と文句をいう家庭もなく、逆に先生一人じゃ大変だろうと、バスの手配の他、お父さんが全部で4人も一緒に同行してくれることになった。涙が出るほど心強く嬉しかった。

雪を見ると思い出す。忘れもしない27年前の12月6日、小雪が舞い散る新潟を早朝出発し、我々は一路東京の日本テレビ本社に向けて出発したのだ。

残念ながら予選を通過することはできなかった。でも、これらの取組を通して、確実にクラスはいい方向に変容していった。あの時代だからこそできた昔話だが、大胆で劇的な変化が必要な場合、豊かなアイデアと挑戦こそ重要だ。

未曾有なコロナ禍という黒船は、「GIGA スクール」という、子どもたちの学びを劇的に変えていく新たなチャンスを提供してくれました。これからは、授業を通して、学ぶ喜びや確かな学力を生むことのできる夢と感動の授業を創造していく時代だ。その我々のめざすべきゴールなきゴールに向けて、教職員も保護者も地域も、智慧を出し汗をかき続けなければならない。

今では40歳代の当時の教え子たちは、会うと今でも真っ先に「仮装大賞」の思い出を話題にする。その時はまさに童心の笑顔だ。

30年近く経った今、「先生は昔と全然変わっていませんね。」「そうか今でもそんなに若く見えるか。」「いや、あの頃から老け顔だったんですよ。」「何(>o<)」「あ、そっか、当時、もしかすると先生も仮装してたんですね。」